
ヒーリング最高

猫美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒール最高

【Nコード】

N0815Z

【作者名】

猫美

【あらすじ】

おかしい。会社帰りの電車の中だったはずなのに。
気がついてみれば赤ん坊。

ああ・・・転生モノってヤツですか。

ストーンと納得してしまう。そこから始まる第二の人生。
魔法のあるファンタジーな世界じゃないですか。

ふっふっふ。となれば、当然ヒールですよ。ヒール。

攻撃魔法？興味ないですな。はっはっは。

／表現が苦しかったとしても一人称の視点を切り替えながら展開し

ていきたいと思っています。頭の中身を書き出すのに慣れていない
為、どうか気長におつきあいいただければと思います。

ギャン泣きした日

記憶がはつきりとしなのだが、あまりの息苦しさで頭痛に思わず泣いた。

大声を出して泣いた。

ギャン泣きつて奴だ。

我ながら、恥ずかしいのだが・・・どうにも苦しかったのだ。頭痛も、締め付けられるような頭痛で泣いた。

いやいや。

ほんと、もうスゴイんだって。

思わず大の大人がギャン泣きするレベル。

大声を出して泣いたので、ちょっとすつきりした。

周囲を見回すが・・・どうにもうまく見回せない。

自分の状況が理解出来ない。

茶髪の看護婦さんが覗き込んで来る。

看護婦さんが何かを喋っているのだが、理解が出来ない。

「なんですか？」

と聞いたつもりなのだが、きちんと喋れたのか怪しい。

耳の調子が何やら変だ。

自分の状況が理解出来ない。

理解出来ないのだが、猛烈に眠い。

フェードアウト。

状況を整理しよう。

どうやら、赤ん坊らしい。

あまりの事に、頭の中が真っ白になったが、事実は事実として受け止めた。

夢なのかと何度も疑ったが、日常が連続しているので、事実のようだ。

ああ、転生モノって奴かと、変な理解をした。

見た感じ、SFモノって訳では無さそうだ。

どちらかというと、ファンタジー系。

魔法の有無は未確認。

相変わらず、周囲の人が何を喋っているのかは解らないが、隣に横たわっている可愛い人が母親のようだ。

ちよっと嬉し恥ずかし。

見つめられると照れる。

茶髪なんだけど、日の光が当たるとキラキラと輝いて、実に綺麗だ。

前世（？）の最後の記憶は、仕事帰りの電車の中だ。

珍しく席が空いていたので座ったら、沈み込む座席のあまりの気持ちよさに眠ってしまった。

そこから先の記憶が無い。

事故にでもあつて死んでしまったのか、脳卒中でも起こしたか。

まあ、考えた所で、寝ている最中に起こったことだ。

意識不明で集中治療室に運び込まれ、身体からは各種ケーブルが延びている状態なのかも知れないが、解らないモノは解らない。

心配してもどうにもならない。

ならば・・・取り敢えず寝よう。

考え事していると・・・とかく眠い。

フェードアウト。

あれから数日経った。

相変わらず、何を言っているのか解らない。

解らないが、母親は可愛い。

父親は・・・ちよつと厳ついが、自分を見てデレデレに蕩けていた。どうやら、良い両親の元に生を受けたようだ。

さて・・・日がな一日、暇で仕方がない。

会話も出来ないし、そもそも、動くこともままならない。

母親とお医者さん、看護婦さんの会話をじ〜つと聞いているくらいか、自分の今後の展望について考えるくらいだ。

まあ、展望を考えるとと言っても、どういふ世界なのが解らないので何とも言えない。

社会人になって、学業から解放されて久しいのだが、また、1からやり直しかと思うとげんなりする。

あの時、こうしていれば・・・という後悔に対し、やり直すチャンスを得たのだ。と考えれば、案外悪くない。

そついう考え方が出来るのも、前世の記憶があるからな訳だが・・・

ふと、心配になるのが、この前世の記憶って奴はいつまで残っているか？と言つことだ。

無くなつても困ることはないんだろうが、あると便利に違いない。

消えないといいなあ。

それにしても、会話が出来ないというのはもどかしい。

赤ん坊という奴は、どうやら身体の部位をつまぐコントロール出来ないから喋れないようだ。

実にもどかしい。

喋ろうと思うと、「うー」とか「あー」になつてしまふ。

とか考え事をしてしていると眠気が襲ってくる。

まあ、逆らう理由もないので寝るとしよう。

フエードアウト。

ギャン泣きした日(後書き)

Twitter @nekomihonpo

発声記念日

2歳になった。

日々、訓練を重ねたお陰で、喋れるようになった。

初めて「とうさま、かあさま」と喋った時、すごい喜びようで、もみくちやにされた。

まだまだ舌つ足らずではあるが、意思の疎通が出来るというのはスバラシイ。

まだまだ単語が解らないが、地道に憶えていくしかないだろう。

ありがたいことに文法は日本語に近い。

文字は、まだ解らないが・・・中国語みたいだと大変だなあ。

くらいに楽観視している。

自分の名前は、ウイル・ランカスター。

ランカスター家の長男だ。

母親は、リリーレルマ・ランカスター。

可愛い系のおっとり美人。

授乳の時、気まずかったのだが、コチラが一方向的に気まずいだけだ。

父親は、ウインザー・ランカスター。

見た目は厳ついが、母親や私に対してデレデレに蕩けるあたりのギヤップが酷い。

公務員という表現が正しいのかは解らないが・・・公務員のようだ。お陰で、良い暮らしをさせて貰っている。

・・・他と比較したことがないので解らないが、少なくとも、お手伝いさんの居る家庭は一般以上貴族未満だろう。たぶん。

ファンタジー系の転生モノで確定のようだ。

ケガをした時に、母親が治癒魔法を使ってくれた。いいね。治癒魔法。スバラシイ。

まだ、世界情勢とかは解らないが、治癒魔法を憶えて損はないはずだ。

ファンタジー系ってことは、RPGみたいな世界観ってことだ。

治癒魔法至上主義とでも言おうか・・・RPGでとにかく優先すべきは治癒魔法だ。という偏った考え方をしている。

いいぞ。治癒魔法。

回復にお金が掛からない。

つまり、装備にお金が回せるんだ。

魔法というと、攻撃魔法に目が行きがちだが、私は断然治癒魔法だ。死ななければいいのだ。

・・・おっと、ついつい暴走してしまった。

そんな訳で、治癒魔法には一方ならぬ思い入れがあるので、がんばって使えるようになりたいと思う。

治癒魔法の才能があるといいなあ。

発声記念日（後書き）

Twitter @nekomihonpo

発声記念日のリリーレルマ（母親）

ウチの子は、ちょっと他所とは違うらしいの。

お母様から、

「子育ては大変よ。夜泣きで夜も寝てられないんだから」とか、

「男の子は大変よ。目を離すとすぐにやんちゃするんだから」

とか・・・散々脅されていたのに・・・夜泣きらしい夜泣きを経験したことがないの。

まさか、私が気がつかずに寝ていたの！？と心配になったのだけれど、ノイナも夜泣きを聞いたことがないっていうし。

夜泣きもさることながら、昼間もあまり泣かないの。

あまり・・・という表現が控えめ過ぎるくらい泣かないの。

あまりにもおとなしいので、心配になってお医者様に相談したのだけれど、

「心配のしすぎですよ、ランカスター夫人。

お子さんは順調に育っていますよ」

と笑顔で言われてしまって、喜んで帰ってきたのだけれど・・・ウチの子は大人しすぎるのではないかしら？

ノイナに聞いても、

「ウィル坊ちゃんは賢い子です。

こちらの言っていることは理解しているようですし、ダメと言っ

たことは守っているように見受けられます。

確かに、ちょっと静かな感じは致しますが「

なんてことを言うし。賢い子なんて言われてしまって、思わず嬉しくなつて頬が緩んでしまつたわ。

それにしても、子供つて不思議。

何を言っているのか理解しようとしているのか、じつところこちらを見つめてるの。

こちらが気がついて尋ねてみると、

「ん？」

つて首をかしげて・・・もう可愛くて可愛くて、思わずだっこしてしまつわ。

不思議と言えば、不思議な遊びをするのね。

部屋の隅の方で、

「あー」

とか

「うー」

つて言っていたかと思うと、

「あーえういううえーおあおー」

とか呪文みたいなこと言い始めるし。

ノイエに聞いても、

「初めて聞きました」

つて言うし。

あれは何なのかしら？

可愛らしいからだっこしてしまつただけねど。

もうすぐ2歳になるうかという頃に、ウィルがしゃべってくれたわ。

もう嬉しくて嬉しくて・・・ウインなんか、もう大喜び。

「とうさま、かあさま」

なんて可愛らしい声で呼んでくれて、ウチの子は天使なんじゃないかって思っちゃった。

でも、いきなり、

「とうさま、かあさま」

なんてしゃべったので、ノイエも驚いていたわね。

ウチのウィルは知識欲の塊ね。

「かあさま、あれはなに？」

「これはなに？」

と質問責め。

色々な物に興味津々で聞いてくるわ。

そういえば、ノイエがお手伝いさんだっことを理解していたみたいだけれど・・・ノイエにでも聞いたのかしら？

ドンドンドンガン！という音が聞こえて、慌てて廊下に出たら、ウィルが階段から落ちて倒れていたの。

慌てて叫びそうになってしまったけど、落ち着いて深呼吸を繰り返したわ。

私が慌てるとロクな事がない。

まずは落ち着けて散々、お母様に言われていたからかしら。

「ウィル坊ちやま。大丈夫ですか？」

ノイエが駆けつけて声を掛けてくれたの。

冷静になってからウィルの様子を見ると、頭を軽く切ってしまったみたい。

頭なので血が凄いことになっているのだけれど、ウィルが、

「ノイエ、かあさま・・・だーじょぶです。
ていけつをおねあいています」

ってすっかりとした受け答えをしたので、かなり落ち着けたわ。
ウィルをそっと抱きしめて、

「聖なる魂よ。どうか、私の息子、ウィルの傷をお癒してください」
と、ヒールを唱えたので、傷は治ったの。

「かあさま・・・いまのは・・・まほーですか？」

「ええ、そうよ。癒しの魔法。もう大丈夫かしら？」

「あい。だーじょぶです。それよりも、まほーのことをおしえてく
あさい」

もう、目をキラキラさせて、魔法に興味津々。

まだ難しいと思うのだけど・・・熱心に聞いていたわ。

将来は大魔道士でも目指すのかしら。

発声記念日のリリーレルマ(母親)(後書き)

T w i t t e r @ n e k o m i h o n p o

誤字修正

訪ねる 尋ねる

会話前後に空行追加

ヒールを試した日

この世界は魔法があることが解った。

大きく分けると3種類。

魔方陣や正確な呪文を唱えることで発動する呪印魔法。

神様(?)へのお伺いを立てることで発動する神聖魔法。

・・・むしろ申請魔法なんじゃないか？

とか余計なツツコミをしたりもするが。

後は、精霊との対話により発動する精霊魔法。

理屈は解っていないようなのだが、魔法を使うには素質が必要らしい。

MPの無い人には使えない・・・みたいなモンのようだ。

そのため、世界中の誰も彼もが魔法を使えるということは無く、一部の選ばれた人間だけが使える・・・と言ったような選民思想もあるらしい。

素質は遺伝しやすらしく、魔法使いの子供は魔法使いの素質があることの方が多いようだ。

数としては、呪印魔法>神聖魔法>精霊魔法となっている。

やはり、精霊と意思の疎通するのが難易度を高めるらしい。

その代わりと言っては何だが、意思の疎通で発動するため、小難しい手続きとか、お約束事が無いため、柔軟性は抜群。

逆に、呪印魔法は、魔方陣だの、呪文だのがガツチガチに決まっているらしい。

神聖魔法はその中間。

神様にお伺いを立てるとのことなのだが・・・別段、神の声を聞いたとか、そういう宗教的な事は無いらしい。

とは言え、身体を治すつてのは、神の奇跡と呼ぶに相応しく、宗教

と結びついているようだ。

魔法の所為で・・・所為と言い切ってしまうのもどうかと思うが・・・科学の発展は遅れている。
物理、化学、自然科学、人体、病理学、e t c、e t c・・・これらがかなり遅れている。

大抵のことは、魔法で片が付いてしまうからだ。
例えば、建造物には物理、数学などが必要なのだが・・・専門外なのでよくは解らないが・・・強度が足りなければ魔法で補えばいいのだ。

と言うか、魔法で強化するのがアタリマエになっている。
人体に関しても研究は進んでいない。魔法で治せばいいのだ。
人間、楽をするとダメだな。

天文だけは、占星術の絡みで結構進んでいる。
あと、魔法学も当然ながら進んでいる。
進んでいるのかは、よく解らないが、歴史は古いらしい。

ヒールっぽいモノを試してみたい。
もどかしいことこの上ないのだが、そうそう、ヒールを掛ける対象が居ない。

まあ、そりゃ、そうだ。
けが人が居た所で、3歳の子供にヒールをさせる馬鹿者は居ない。
と、なると、動物にでも・・・とは言え、これまた、素直にヒールを受けてくれるとも思えない。
さて、困った。

と、なると、植物にでも・・・とは言え、これまた、効果が解りにくいのが問題だ。
等々、もやっとな問題を考えながらうろついていたら、町を出てしまった。
やべっ。

さっさと戻らないと。

と、思っていたら、目の前に枯れた森が広がっている。

町の隣に、こんな寂しい風景が広がっているとは思わなかった。

「ふむ」

この枯れ木が、死んでしまっていたら、どうにもならないが、もし・
・もし、万が一、生きていたら・・・ヒールが効くんじゃないか？
と思いついてしまった。

町に戻るのヒールを試してからでも遅くはないか？

・・・ってことで試すことにした。

枯れ木に手をかざし、目をつぶる。

「ヒール」

・・・ダメか。

何も起こらないな。

そもそも、神聖魔法らしからぬ唱え方じゃだめか。

「我、彼の者を癒すことを願いたてまつらん。ヒール」

前に母様が使った呪文が思い出せないので適当だ。

こんなのでいいのかわかどうかは解らないが、身体から何かが抜ける感
じがして気だるくなった。

ちなみに、ヒールと唱えただけでは気だるくなったりしない。

それっぽい呪文を加えることで気だるくなる感が追加された。

ってことは、ヒール・・・かどうかは解らないが、何かが発動した
んだろう。

見た目、なんら変わりはないが、ちゃんと発動したんだろうか？

まあ、枯れ木が急にみずみずしくなっても気持ち悪い。

時間が掛かるんだろう。

もう一発くらい撃ち込んでおくか。

「我、彼の者を癒すことを願いたてまつらん。ヒール」
気だるさが一気に増した。

いかん。立ってるのも億劫だ。

なるほど。

これがMP切れ状態か？

座りたくてしょうがない衝動を抑え込みつつ、取り敢えず、町へ戻った。

2発でMP切れとは情けない。

情けないが、枯れ木相手なら誰も困らないし、実験には良いかも。

ばれて大事になっても面倒だし・・・街道から少し奥まった所で実験することにしよう。

今日は、良い収穫であった。

満足である。

はっはっは。

次の日から、2mほど奥まった所の木に毛糸を結び、ヒール実験を開始した。

2日後には、枯れ木に花・・・ではなく、芽吹いてきた。

自分のヒールに効果があったことが解り、小躍りしてしまった。

が、一週間後には、再び枯れてしまった。

別の木々も同じ状態になったことから、根本的に何かが間違っているらしい。

とは言え、何が間違っているのか解らないので、日々、ヒールを続けた。

三週間も経とうかという頃、ふと思い至った。

そもそも、枯れた原因は何だったのか？

原因も取り除かずにヒールをした所で、穴の空いたバケツに水を注いでいるだけではないのか？

さて・・・植物の専門家ではないので、植物の病気が解らない。これでは、単純にヒールのスパルタをしているだけではないか。

まあ、その甲斐あって、ヒール3発まで撃てるようになったが・・・それはそれ。

相手の状態を調べる手段があっても良さそうだ。

再度、枯れてしまった木に手をかざし、目をつぶる。

「我、彼の者の不調を知りたいを願いたてまつらん。リサーチ」
かなり適当な呪文ではあるが、そういう適当さを寛容に受け止めてくれるのが神聖魔法のいい所・・・というかい加減な所。
まあ、機能というか、効能が無かったら発動しないけどね。
目をゆっくり開けると、枯れ木にぼんやりと色が付いている。
色が付いているというか、もやもやがまとわりついている。
ほとんどは、白というか灰色なのだが、地面・・・恐らく根っこがあるであろう部位が赤い。

つまり、根っこに病気があるのかな？

病気の詳細が解らないが、治せるもんだろうか？

ま、治ったらラッキーくらいの意気込みでやってみますか。

「我、彼の者の異常を取り除くことを願いたてまつらん。リコンディション」

赤い部位が青く光り、明滅を繰り返した後、薄い緑になって白に変わった。

治ったってことだろうか？

「我、彼の者を癒すことを願いたてまつらん。ヒール」

・・・さて、こいつはしばらく様子見だな。

ってことはだ・・・今までヒールしてきた木は、全てやり直しか。やれやれだ。

リサーチは、それほどでも無かったが、

リコンディションは、気だるさが多い気がするな。

今のMPでは無理があるってことだろうか？

今のMPだと、リサーチ、リコンディション、ヒールでほぼすっからかな。

ま、続けていれば、MPも増えるだろうし・・・まだまだ若いんだ。
どうとでもなるだろう。

本日作業分目印の毛糸をくくりつけ、町に戻ることにした。

ヒールを試した日(後書き)

Twitter @nekomihonpo

ヒールを試した日のノイナ（家政婦）

「ウイル坊ちやま〜？ウイル坊ちやま〜？」

お屋敷の中をお探しましたが、見当たらず、今は庭を探してさまよっているのですが・・・見当たりません。
ウイル坊ちやまは、どこに行かれたのでしょうか？
万が一・・・ということも考えられます。
早くお探しせねば！

「あらあら、ノイナ。どうしたの？」

「あ、リリー奥様。」

も、申し訳ありません。

先ほどから、ウイル坊ちやまのお姿が見当たらないのです」

ちよつと目を離した隙に・・・なんてのは言い訳にしかありません。
ひたすらに謝り、一刻も早く探し出さねばなりません。

「あら、それなら・・・」

「え？」

「少し前に、

『かあさま、町をみてきます』

って言うので、

『気をつけて行ってらっしゃい』

って見送ったのよ。

ノイナに伝えておくべきだったわね。

「ごめんなさい」

「いえ・・・私のことはいいのですが・・・ウイル坊ちやま、お一人で行かれたのですか？」

「そうねえ。」

お友達と行くとは聞かなかつただけけれど」

い、いくらなんでも放任主義過ぎます。

こ、これは急いでお探しせねばなりません。

「お、奥様。

いくらなんでも危険過ぎます。

ウィル坊ちゃまは、しっかりしたお子ではありますが、まだ3歳です。

誘拐・・・は無いかと信じていますが、大人の力には逆らえませ
ん。

どこかでケガをしているかも知れません」

「あらあら。

確かに、そういう心配はあるかも知れないけれど・・・ノイナは
心配しすぎじゃないかしら？」

「いいえ、奥様。

心配しすぎということとは、決してありません」

「男の子なんですから、少しくらい、やんちゃでもいいと思つのだ
けれど？」

奥様がやんちゃ過ぎます！・・・とは言えない私。

「私、急いで探しに行つて参ります」

「あらあら。そう？悪いわね」

「では、行つて参ります」

取る物も取り敢えず、町に出て聞き込みです。

買い物なじみのおやつさんから有力情報を得ました。
なんでもウイル坊ちゃまらしき子供が、町の外の方へ歩いて行った
そうです。

何故、そこでお止めしないのかっ！

と理不尽なことを言いたくもあつたのですが、まずは坊ちゃまの安
否が大事です。

こちらの外には枯れ森しかなかったはず。
誘拐の危険も少ないはずです。

枯れ森には、危険な野生動物も居なかつたはずです。
ある意味、一安心と言つた所でしようか。
町の外へ急ぎましょう。

「あれ？ノイナさんじゃないか。
そんなに急いでどこに行くんだい？」

「あ、ジャックのおやじさん。
ご無沙汰しております。

ウイル坊ちゃまが、こちらの方に来たと聞いて、大急ぎでやつて
きたのです。

見かけませんでしたか？」

「ウイル坊ちゃんつてくと、ランカスターんとこの坊主だな？」
「はい。」

まだ3歳の小さな子なのですが、枯れ森の方へ歩いて行つたとい
う話を聞きました・・・」

「ふむむ・・・じゃあ、あれが坊ちゃんだったのかな？」

「！？・・・何かご存知なのですね！？」

「あ、ああ・・・なんか小さい坊主が、肩を落としながら町の中心
へ向かつているのを見たからな」

「ええっ！？」

い、いつですか!？」

「ああ、それこそ、今しがただよ」

な、なんとということでしょう。

これは急いで戻らなければなりません。

「私は急いで追わねばなりません。

貴重な情報、ありがとうございました。

また、お店の方には、今度寄らせていただきます」

「あ・・・ああ・・・すぐに追いかければ見つかるぞ」

「はい!ありがとうございます。」

それでは失礼します」

なんとということでしょうか。

いえいえ。

貴重な・・・それこそ珠玉な情報を頂きました。

急いで町中に戻りましょう。

「ウイル坊ちやま〜!」

あれからすぐにウイル坊ちやまを見つけることができました。

ああ、ご無事で何よりです。

お手々を引いて家に帰りました。

それからと言う物、ウイル坊ちやまが、町へ出かけているようなのです。

ふと、半刻（35分程度）〜1刻（70分程度）ほど、ウイル坊ちやまを見かけない日があったのです。

思い返してみると、毎日、半刻程度見かけないのです。

リリー奥様と一緒になのかと思い、確認をしてみたのですが、

「ノイナと一緒にだったんじゃないの？」

との仰せ。

こっそりと抜け出しているようなのです。

本当に、本当に偶然、買い物途中で、ウイル坊ちゃまらしい後ろ姿を見かけたのですが、その日は見失ってしまいました。

ウイル坊ちゃまに限って、悪さをしているとは考えにくいのですが、もし、ここでウイル坊ちゃまが悪の道に走ってしまったては、ランカスター家の家事を預かる身の名折れ！

なんとしても確かめねばなりません！

と、心に誓って、こっそりと監視しているのですが・・・今日もまた、気がつくとおりませんでした。

「ウイル坊ちゃま？」

ヒールを試した日のノイナ（家政婦）（後書き）

Twitter @nekomihonpo

まだまだ駆け出しの段階で評価をいただき、ありがとうございます。
その評価に恥じぬよう・・・ご期待に添える展開を書くことが出来
ればと思っております。では。

誤字修正

会話前後に空行追加

前世の記憶に苦しんだ日(前書き)

閑話休題です。

前世の記憶に苦しんだ日

4歳にもなれば、色々学んでも不思議は無いだろう。
無いよな。

うん。

つてことで、父様や母様、ノイエを質問攻めにして、知識を蓄えている最中だ。

まずは身近な所から。

父様の職業は公務員。

宮仕えつてのが正しいのだが、公務員じゃん。

厳つい顔の割に・・・文官とのこと。

文官にしては立派な体躯だと思っただが・・・文官だそう。

何でも、王直属の組織で、直務国税特捜査察官と言っらしい。

えっと・・・マルサって奴ですか？

言葉の響きがデスクワーク似合わない感じなんですけど・・・父様

曰く、文官だそう。

王直属だけあって、公務員の中では貰いの多い職業らしい。

そんな訳で、我が家にはノイエというお手伝いさんがいる訳だ。

ノイエは、母様と幼なじみとのこと、母様のことをよく解っている感じがする。

母様の天然というか、おっとり具合に振り回されていることも多いが・・・関係は良好だ。

ノイエが成人になるちよつと前に、ご両親を亡くしてしまい、母様の家で厄介になったのが、お手伝いさんになる契機らしい。

私が産まれたのは、アルバ・ヨルド王国というアルバ地方のヨルド

王家が治める国だ。

現在の王は、フィーというお名前だそうで・・・フィヨルドかよ！と突っ込みを入れたくなってしまうた。

突っ込みを入れた所で誰にも理解されないのだが・・・悲しい。

比較的、中規模な王国で安穩とした生活を送ることが出来ている。国家間で戦争とか起こらないのか心配になって、父様に聞いてみたのだが、

「ノラとかクロの脅威があるからね。

国家間で争っている場合では無いんだよ。

時には大侵攻があつて、国家間で協力しないとイケないからね」

「ノラとかクロですか・・・ノラとかクロって？」

「ああ、そうだな・・・ノラってのは大型の原生動物だな。

大きな牙を持っていたり、素早い動きで飛びかかってきたり・・・大人二人分や三人分はあつたりするからね。

さらに大型のノラは、十人分くらいもあつたりするんだ。

クロってというのは・・・そうだな・・・闇の眷属って呼ばれている者達だ」

「闇の眷属・・・ですか」

「そうだね。

町中には居ないけれど、死体が動いたり、人の生き血を飲んだり、呪いを掛けたり・・・という者達だよ」

「そうですか。

そういう脅威があるから、一致団結して、人々を守っているんですね」

「ああ、そうだよ」

ってことで、国家間というか、無意味な戦争がないのはいいことだ。っていうか・・・ノラク かよ！と突っ込みみたい。

実に突っ込みたい。
突っ込んだ所で、本当に誰にも理解されない。
なんだ、このもどかしさ。

『くっ！前世の記憶が俺を苦しめる！！』

とか言う及格好い感じになって、厨二病っばいけど、内情は実にくだらない。
くそっ。

「前世の記憶が俺を苦しめる！！」

・・・想定外です。

前世の記憶に苦しんだ日(後書き)

T w i t t e r @ n e k o m i h o n p p o

誤字修正

納める 治める

会話前後に空行追加

ケンカをした日（前書き）

ここ数話、いじめ、虐待（を臭わせる）表現が出てきます。苦手な方は飛ばして下さい。

ケンカをした日

日課のヒールをするべく、枯れた森へ向かう。

かれこれ2年も続けていれば、ヒールの回数も増え、生い茂ってきた樹木も1000本近くになっている。

・・・本数を数えるのが面倒なので数えていないが。

念のために追跡者の目くらましをかねて町中を右往左往。

まあ、これも日課になってはいるのだが・・・

そろそろ町外れにさしかかろうかという下町のさなか・・・見た目、自分より幼い感じの女の子が泥団子を投げつけられている。

おいおい。ブラザーメンソウル、女の子をいじめるなんてどんな見だい。

ゴッ！

「あっ」

今のは石か!?

「おい、やめろっ」

主犯格というか・・・ガキ大将が振り返る。

自分より3歳か4歳上かな？

・・・子供はようワカラン。

「なんだ、このガキ？どこのガキだ？」

「さあ、どこいらじゃ見かけない顔ですね」

「寄つてたかつて、女の子をいじめるとは、ずいぶんと格好いい」としてんな！おい」

彼らと女の子の間に立ちはだかる。

「はあ？イミビトなんだから、いいんだよ」

「邪魔だ。どけよ」

「イミビトだかなんだか知らないが、女の子は守るモンだ。それが男ってモンだ」

「いいから、邪・魔・だつ！」

ゴツ！と鈍い音が頭に響く。

殴ってきたか。

そうか、殴ってきたか。

このクソ野郎！

殴り飛ばされたが、意識があればこっちのモンだ。

自分に対してヒールを念じる。

「こんの・・・卑怯者がっ！」

勢いよく起き上がり、勢いそのままに拳を振り抜く。

ゴツ！

いってえ。

コブシ痛いよ。

くそう。

ヒールばっかで身体なんか鍛えてねーよ。

くそう。

相手がゆっくり起き上がってくる。

取り巻きの3人が周囲を取り囲む。

1人だけ壁際で傍観しているが・・・

「いってえな。クソが。」

やっつけてやる。

お前らは手を出すなよ」

「ジャン、やっちまえ」

「クソガキ、覚悟しとけよ」

簡単には逃げられそうに無いな。

倒せるとも思えないし・・・ヒールで身体のダメージは抜けるけど、スタミナとMP不足の気だるさは治らないしなあ。

えっと・・・こういう場合ってのは・・・アゴ狙いで頭を揺らせばいいのか？

こんなナリじゃダメージ出せないだろうし・・・足狙いと思わせつつ、アゴ狙いかな。

等と考えていたら、相手のパンチを避けそこねた。

「くっそ！」

ローキック！

・・・ハズレ。

くっそ。

やっぱ持久戦か。

ケンカをした日（後書き）

T w i t t e r @ n e k o m i h o n p o

誤字修正

会話前後に空行追加

ケンカをした日のイミビト(いじめられっ子)(前書き)

ここ数話、いじめ、虐待(を臭わせる)表現が出てきます。苦手な方は飛ばして下さい。

ケンカをした日のイミビト(いじめられっ子)

・・・あまり出かけたく・・・なかったの・・・けれど・・・お使
いに行かないと先生が怒る・・・から、町に出かけたの。

「忌み人がいるぞ」

「忌み人がこんなトコ歩いてるんじゃないよ」

ビシヤッ

・・・泥団子・・・

ビシヤッ

「忌み人は出てけ」

ビシヤッ

「うわっ、きたねえ」

ビシヤッ

・・・服・・・汚れちゃった・・・怒られる・・・かな。

ゴッ

痛ッ。

キーンッ。と耳鳴り・・・

「おい、やめろっ」

・・・何？

「なんだ、このガキ？どこのガキだ？」

「さあ、ここいらじゃ見かけない顔ですね」

「寄つてたかつて、女の子をいじめるとは、ずいぶんと格好いい」としてんな！おい」

何？・・・この子・・・誰？・・・何？

「はあ？忌み人なんだから、いいんだよ」

「邪魔だ。どけよ」

そう。・・・忌み人だもの・・・仕方・・・ないの。

「イミビトだかなんだか知らないが、女の子は守るモンだ。それが男つてモンだ」

「いいから、邪・魔・だつ！」

ドカッ

・・・私の目の前で、男の子が・・・殴られる。

「あ・・・」

やめて。・・・この子は関係・・・ない。

「こんの・・・卑怯者がっ！」

・・・忌み人なのは・・・ボク。

「いつてえな。クソが。やっつけてやる。お前らは手を出すなよ」

でも・・・声が・・・出ない。

・・・怖い。怖い。怖い。

「ジャン、やっちまえ」

「クソガキ、覚悟しとけよ」

どうしたら・・・いいの？

・・・目の前の男の子の方が・・・小さい。

・・・勝てる訳・・・無い。

「くっそ！」

・・・忌み人のボクなんかのために・・・ボロボロにされちゃう。

・・・どうしたら・・・どうしたら・・・

・・・怖い。怖い。怖い。

『ピリルルル！ピリルルル！』

「やべえ。イヌだ」

「ジャン！巡視が来るぞ」

「そんなガキほっとけ」

巡視官が・・・来る？

・・・助かった・・・の？

・・・よかった。

・・・ぼろぼろ・・・だけど、大けがは・・・無い？

「ふう。・・・とは言え、こっちも逃げた方がいいかな？

ねえ、行くよ？」

何？・・・手を握られた。

「あ……」

だめ……だよ。

……忌み人に触れたら……よくないよ？

「面倒はごめんだから行くよ？ほら」

「え……」

や……引っ張られる。

……ここ……町の外……

「はあはあ」

……こんなところまで……来ちゃった。

「はあはあ」

「はあ……ごめんね。ちよつと傷見せてね」

「え……」

……男の子が頭に……触る。

「痛ッ」

「あつ、ごめんね。」

ちよつと待ってね」

「え……いい……だ、大丈夫だから」

「ちよつと傷口濡らすよ」

「や……だ、大丈夫だから」

「じゃあ、ちよつとじつとしててね」

聞いて・・・くれない。

・・・近くの小川で・・・布を濡らして・・・当ててくれた。

・・・目をつぶって片手をかざしてるけど・・・何をしてる・・・の？

「我、彼の者を癒すことを願いたてまつらん。ヒール」
「えっ!？」

・・・頭を触ってみる。

「・・・痛くない」

「ん。傷も残ってないし、大丈夫そうだね」

「な・・・何をしたの？」

「ちよつとヒールをね。」

・・・それより、汚れちゃったね。ウチに来なよ」

・・・ヒール!？」

「ねえ、ウチに来て身体を綺麗にしよう?」

「え・・・だめ」

びっくりして・・・手を振り払う。

「!・・・ごめん・・・なさい・・・ボク、忌み人だから・・・」

ボク・・・走って、その場から・・・逃げ出しちゃったの。

男の子が何か言っていたけど・・・よく聞こえなかったの。

何故か・・・涙が出てきて・・・止まらなかったの。

ケンカをした日のイミビト(いじめられっ子)(後書き)

Twitter @nekomihonpo

修正内容

会話前後に空行追加

人さらいの日(前書き)

ここ数話、いじめ、虐待(を臭わせる)表現が出てきます。苦手な方は飛ばして下さい。

人さらいの日

昨日はまんまと(?)逃げられた。

予想外の展開に為すすべ無く逃がしてしまった。

うむ。不覚。

イミビトが何だか解らなかつたので、母様に聞いてみた。

「忌み人と言つて、迫害・・・そうね、いじめられている人よ。

彼らは何も悪くないのだけれど、いじめられ続けることで、悪いことをしてしまう人も多いわ」

との事だ。

迫害されている理由までは、教えてくれなかつたが、恐らく色々あるのだろう。

さて、今日はだ・・・

昨日のあの子を探すため、下町にやってまいりました!じゃん。

はい。簡単に見つかる訳ありません。

ですよ〜。

忌み人さん、どこに居ますか?等と喧嘩を売って歩く訳にも行きませんし。

地味に困りましたね。

「こんにちは」

「ん?」

後ろから声を掛けられたようなので、振り返ると、昨日のいじめのお仲間が居た。

「無事に逃げられましたか?」

雰囲気から、昨日の続きを今ココで！という感じでは無いのだが、
気安く話しかけられるような友好的な関係でも無かったと思うのだ
が・・・と、思い出した。

1人、離れて見ていた子だな。

「そうですね。」

喧嘩も長引かずに済みましたし」

「キミは面白い子ですねえ」

「・・・ガキ大将のお仲間じゃないんですか？」

「ガキ大将？・・・ああ、ジャンの事ですか。」

いや。お仲間ですよ？

まあ、手下って訳でもありませんがね」

なんとも、ませた感じのする子だな。

「で、そんなお仲間さんが、何用ですか？

昨日の続き・・・という訳でも無さそうですが？」

「ちよつと確認をね・・・キミはヒールが使えるんですか？」

「へえ。バれてましたか。」

そうですね。ヒールです。

どうします？卑怯者とでもなじりますか？」

「いやいや。」

喧嘩つてのは自分の力でやるモンだと思えますよ。

そのヒールだってキミの力ですからね。

ただ、子供にしては凄いなと思ひましてね」

「・・・変な人ですね」

「いやいや。」

ヒールが出来るような凄い子とは友達になつておいた方がいいか
な？と思ひましてね」

「いじめの仲間になれ・・・と？」

「ああ・・・それは・・・うん。いじめたくていじめてる訳じゃないんですがね」

「理由はどうでもいいですよ。」

「僕はあの子の味方です」

「・・・嫌われてますかね？」

「好かれる理由があるとでも？」

「・・・無いですかね。」

仲間になると、いじめられませんか？なんてのも嫌われそうですし」

「ふう、そうだね。」

好きこのんでいじめられたいとは思わないけど、いじめの仲間にはなりたくないしね」

「取り敢えず、いじめの話はやめましょうよ？」

「ホント・・・変な人ですね。」

「・・・もう行ってもいいですか？」

「ええ。呼び止めてすいません。」

「お急ぎですか？」

「ふむ？」

「・・・つかぬ事を聞きますが、昨日の子がどこにいるか知りませんか？」

「はあ？キミも不思議な子ですね。忌み人を探しますか」

「ええ。ちよつと探しています」

「ミレイは、この先のハズレの孤児院に居ますよ」

「ミレイっていうのか・・・」

「名前、聞かなかつたんですか？」

「・・・逃げられたんですよ」

「ぶ・・・ふはははっはは」

笑われた。思いつきり笑われた。

くそう。

そんなに楽しいか。

くそう。

自分でも間抜けだとは思ってたさ。

再認識させないでくれ。

「・・・わ、笑うなよ」

「いやいや。すみません。ぷは。

いやいや。名前も知らないのに探してるんですか」

「ああ・・・ちよつとね」

「ついて行っても？」

「はあ？・・・うん？」

「邪魔はしませんよ？」

「誤解されて逃げられても困るからやめとく」

「・・・そうですか。そうですね。

残念ですが、邪魔はしないと仰いましたし」

「こっそり付いてくるのも無しだぞ」

「ええ、解ってますよ。

そうそう。お名前を聞いても？」

「普通、自分から名乗るモンですよ？」

まあ、お約束だからいいけどさ。

ウイル。ウイル・ランカスター。5歳だ」

「5歳！？すごいですね。

アルフ・ニナカ。7歳です」

「アルフ・・・でいいかな？変な奴だな」

「ウイルほどでは、ありませんよ」

「まあ、いいや。助かったよ」

「礼にはおよびませんよ」

妙にませたというか、クールを決め込んでるのか、本当にクールな

のか・・・いまいち判断が付かないが、思ったより面白い奴だ。

まあ、それはそれ。

教えられた方へ行ってみると、予想に反して、立派な建物が見えた。これが本当に孤児院なのか？

表札は出ていないようだが・・・孤児院が儲かる事業とはこれっぽっちも思えない。

なんでこんなに立派な建物なのか？
ぐるっと建物を一回り。

表の立派な建物に隠れるかのように、裏にひっそりとボロ屋敷が見えた。

こっちが孤児院なんだな。

と言うのは解る。

じゃあ、表のは何だ？

別の建物・・・には同じ敷地に建っている。

同じ敷地とは言っても・・・

ぼろ屋敷は倉です。と言われても不思議はないくらい

端っこに追いやられているし・・・

それにしてもボロだ。

・・・とにかく酷い。

そのボロ屋敷の裏（？）に昨日の子・・・ミレイと言ったか・・・が居た。

昨日は泥で汚れてしまったが、

今日は黒髪がうっすらと蒼く光って綺麗な子だ。

ボロボロの堀をぐぐり抜けて、まずは挨拶だ。

「こんにちは」

「!?!?・・・こ、こんにちは」

「少し、お話してもいいかな？」

「……だめ」

「……とりつく島もないってのは厳しいです。
母様……めげそうです。」

「それは……忌み人だから？」

「……そう。……ボク、忌み人だもの」

「うん。僕は気にしないよ？」

「……気にした方が、いい」

え？

いやいや。

気にしないって言ったのに……気にした方がいいとは……面白
い返しだ。

「まあ、いいや。」

僕の名前はウィル。ウィル・ランカスター。

君の名前は？」

「え？……えつと……ミ、ミレイ」

「そっか。ミレイ……よろしくね」

と右手を差し出す。

「えつと……」

おずおずと右手を差し出してきたので、こちらからシェイクハンス。

「うんうん。」

「じゃあ、ミレイとは友達ってことでいいよね？」

「え？……な、何？」

「何か急ぎの用事ある？」

「えっと・・・何もない・・・けど？」

「じゃあ、行こう」

かなり強引だけれども、握手したついでにそのまま引つ張って移動を開始した。

「や・・・ま、まって」

いきなり家に連れて行ってもいいんだけど、それもハードルが高そうなので、取り敢えず、枯れ森の奥に連れて行こう。

あそこなら、人も来ないし、最近では果実もあるし、おもてなしも出来そうだ。

どうも、あまり人目に付きたくないようなので、裏道、人気のない道、町の外縁を選んで移動する。

言葉では軽く戸惑いと否定を口にするが、身体を突っ張ってまでの反発はない。

つてことで、嫌がる言葉は全て無視した。

うん。我ながら外道っぽい。

これでは悪役では無いか。

よいではないか。

よいではないか。

・・・うん。

ま、いつか。

「わあ・・・」

枯れ森の奥に到着。

「ここ・・・枯れ森？」

「・・・入り口は枯れ森・・・だったのに」
「そうだよ。枯れ森だよ」

「あう・・・ボクを連れ出して・・・どうするの？」

「ああ、まあ、友達になりたいから・・・かなあ？」

「・・・忌み人なの？」

「忌み人つてのが解らないからね」

「・・・変なの」

「そうかな？」

「まあ、いいや」

「・・・いいんだ」

「果物食べる？」

「・・・果物！？・・・えつと・・・」

「遠慮しなくていいよ。森の果物だし」

「・・・大丈夫？」

「大丈夫じゃないかも」

「え！？」

「忌み人と友達になりたいって病気になっちゃっ」

「え！？」

「・・・えつと・・・大丈夫？」

「・・・そんな目で見ないで」

失敗するといたたまれない。

実にいたたまれない。

いたたまれなさすぎるので、赤い果実をもぎ取る。

アダムの果実というらしいが・・・リンゴに似ている。

どう食ってもリンゴに似ている。

アダムとイブの禁断の果実かよ！

突っ込みを入れたくなかったが、神話とか関係無いらしい。

アダム家で流通を取り扱ってるかららしい。
なんだ、その理由。

スイカをアダムさん家で扱ったら、それもアダムの果実か？
と思うのだが、どうも果物の流通の祖らしい。

らしい・・・ってのは、アダム家が既に没落しててうんぬんかんぬ
ん。

要するに解らないらしい。

いい加減すぎる。

それはそれ。

ほんと、リンゴまんまなので、そのまま食べられる。

枯れ森でのおやつにはありがたい。

「ほら」

「・・・いいの？」

「うん。僕のじゃないしね」

「・・・えっと・・・頂きます」

ミレイが小さくお辞儀をして、両手で小動物みたいに食べる。
うん。かわいらしい仕草だ。

身だしなみも整えれば、かなりかわいいんじゃないか？

「・・・おいしい・・・」

ぼわつとした笑顔だ。

前髪が気になるな。

ちよっと手で軽く前髪を上げてみる。

「や!?!?・・・な、何？」

「あ、ごめんね。」

僕のご事は気にせず、食べてていいよ。

それとも、もつと持ってくる？」

ふるふると否定。

「あまり・・・幸せになると・・・後がつらい」

何を言っているんだ。

シヨックだった。

リンゴ1個で・・・しかも森の果実だ。

タダで手に入れた果実1個で・・・幸せと言えてしまう境遇。

ものすごくシヨックだった。

他にも色々シヨックな事があるんだが、どうしても気になったので、彼女の手を取った。

「手、見せてね」

「え・・・や！」

否定はするけど、強烈な否定はない。

彼女の手を取って見る。

不自然なやけどの跡が多い。

「我、彼の者の不調を知ることをお願いたてまつらん。リサーチ」

だめか。

特に不自然な点は見受けられない。

やけど跡だからか・・・治ってるしなあ。

治ってるモンはダメだろうなあ。

「我、彼の者を癒すことをお願いたてまつらん。ヒール」

ダメかあ。

「あう・・・あ、あの・・・」

「ごめんね。」

僕のヒールじゃ、やけどの跡は消えそうにないや。

まだまだ子供だから、そのうち目立たなくなるとは思っけど・・・このやけどは・・・どうしたの？」

「・・・灰皿なの」

「は？灰皿？」

「・・・うん。・・・忌み人だから」

どういふことか理解したのと同時に、自分でも頭が沸騰するのが解った。

孤児院の大人が、ミレイを忌み人だからと虐待している！

あまりの薄汚さにめまいがした。

このままじゃダメだ。

ミレイが本当にダメになってしまう。

「ミレイ・・・ウチに行こう」

強い調子で言った。

「・・・やー！」

更に強い調子で、手を振りほどかれた。

「え？・・・ど、どうして？」

「・・・親との仲・・・悪くなっちゃっ」

言うが早いか、彼女は駆けだしてしまった。

「え？」

すぐに追いかければ、追いつけたのだろうか、
何というか・・・あっけにとられて、追いかけるどころではなかつた。

親との仲が悪くなる？

どういうことだ？

えっと・・・

普通の親ならば、忌み人を嫌う？

忌み人を連れてきた子との関係がまずくなる？

ってことだろうか？

説明を求めようにも、逃げられてしまったし・・・

また明日にするか。

まずは・・・一応、母様に断りを入れておくか・・・

人さらいの日（後書き）

Twitter @nekomihonpo

感想、評価ありがとうございます。

ミレイの「・・・」が多いのは意図的です。

自分でもちよっとウザいかな？と思いますが、表現とお目こぼしただければ幸いです。

人さらいの日のアルフ（いじめっ子）（前書き）

ここ数話、いじめ、虐待（を臭わせる）表現が出てきます。苦手な方は飛ばして下さい。

人さらいの日のアルフ（いじめっ子）

学院が休みなので暇ですね。

ジャンは家の手伝いで忙しいでしょうから、本当に暇です。

ぼくっと町ゆく人を眺めていると、さつきからちよるちよると行ったり来たり・・・昨日のちよっと生意気な子ですね。

喧嘩の最中に、自分にヒールをしているように見えたのですが・・・あんな小さい子が、ヒールを使えるモノなんですか？

そもそも、無詠唱のヒールなんて可能なんですか？

しかも、結構な回数を自分にヒールしているように見えました・・・そんなにヒールを使えるモノでしょうか？

特殊体質で超回復を持っている可能性も否定できませんね。

疑問だらけです。

口口に聞いてみたいところですが、休み明けまで無理ですね。

・・・本人に聞いてみますか。

「こんにちは」

「ん？」

「無事に逃げられましたか？」

警戒されていますかね。

なんとも仕方ないですが。

「そうですね。

喧嘩も長引かずに済みましたし」

・・・おや？対応をしてくれるようです。

「キミは面白い子ですねえ」

「・・・ガキ大将のお仲間じゃないんですか？」

「ガキ大将？・・・ああ、ジャンの事ですか。」

いや。お仲間ですよ？

まあ、手下つて訳でもありませんがね」

ガキ大将ですか。

そうですね、ガキ大将ですね。

「で、そんなお仲間さんが、何用ですか？

昨日の続き・・・という訳でも無さそうですが？」

「ちよつと確認をね・・・キミはヒールが使えるんですか？」

「へえ。バれてましたか。」

そうですね。ヒールです。

どうします？卑怯者とでもなじりますか？」

「いやいや。」

喧嘩つてのは自分の力でやるモンだと思えますよ。

そのヒールだってキミの力ですからね。

ただ、子供にしては凄いなと思ひましてね」

本当にヒールでしたか。

結構な回数、使っていたように見えたのですが・・・あまり疲れていたようには見えませんですし・・・

「・・・変な人ですね」

「いやいや。」

ヒールが出来るような凄い子とは友達になつておいた方がいいかな？

と思ひましてね」

「いじめの仲間になれ・・・と？」

う・・・厳しいところを突いてきますね。

「ああ・・・それは・・・うん。」

「いじめたくていじめてる訳じゃないんですがね」

「理由はどうでもいいですよ。」

「僕はある子の味方です」

「・・・嫌われてますかね？」

「好かれる理由があるとでも？」

「ごもつともですね。」

「・・・無いですかね。」

仲間になると、いじめられませんよ？なんてのも嫌われそうです

「し」

「ふう、そうだね。」

好きこのんでいじめられたいとは思わないけど、いじめの仲間にはなりたくないしね」

実際に、耳に痛い話ですね。

「取り敢えず、いじめの話はやめましょうよ？」

「ホント・・・変な人ですね。」

「・・・もう行ってもいいですか？」

「ええ。呼び止めてすいません。」

「お急ぎですか？」

「ふむ？」

「・・・つかぬ事を聞きますが、昨日の子がどこにいるか知りませんか？」

「はあ？キミも不思議な子ですね。」

「忌み人を探しますか」

「ええ。ちょっと探しています」
「ミレイは、この先のハズレの孤児院に居ますよ」
「ミレイっていうのか・・・」
「名前、聞かなかったんですか？」
「・・・逃げられたんですよ」
「ぶ・・・ふははははは」
「・・・わ、笑うなよ」
「いやいや。すみません。ぶは。
いやいや。名前も知らないのに探してるんですか」
「ああ・・・ちょっとね」

是非とも見てみたいですね。
興味が湧いてきました。

「ついで行っても？」
「はあ？・・・うん？」
「邪魔はしませんよ？」
「誤解されて逃げられても困るからやめとく」

ああ、そうですね。

いじめの仲間・・・と思われるも、彼には迷惑でしょう。

「・・・そうですね。そうですね。
残念ですが、邪魔はしないと申しましたし」
「こっそり付いてくるのも無しだぞ」
「ええ、解ってますよ。
そうそう。お名前を聞いても？」
「普通、自分から名乗るモンですよ？
まあ、お約束だからいいけどさ。
ウイル。ウイル・ランカスター。5歳だ」

「5歳！？すごいですね。」

アルフ・ニナカ。7歳です」

「アルフ・・・でいいかな？変な奴だな」

「ウイルほどでは、ありませんよ」

「まあ、いいや。助かったよ」

「礼にはおよびませんよ」

ほんと、面白い人です。

ウイル・ランカスターですか。

口口に紹介したいところですが・・・中々難しいでしょうね。

いじめっ子の仲間・・・のままですかね？

彼がウチの学院に来てくれると楽しそうです。

人さらいの日のアルフ（いじめっ子）（後書き）

Twitter @nekomihonpo

ストックが無くなるので、あまり連続で上げたくないのですが、反応があると、つつい公開したくなる病。

誤字修正

タイトルの「の」抜け

来客の日（前書き）

ここ数話、いじめ、虐待（を臭わせる）表現が出てきます。苦手な方は飛ばして下さい。

来客の日

昨日、母様に断りを入れた後、速攻でミレイを探しに出たのだが、見つからなかった。

さすがに孤児院に乗り込んでまで・・・という勇氣はなかった。

家に帰ってから、父様と母様にミレイの話をした。

2人とも、最初は忌み人つてことで嫌悪感を示したが、最後は連れてきて良いと言ってくれた。

虐待の可能性が決め手になったようだ。

ミレイが、自分と両親との仲を気にした。

というのも効いている。

まあ、コレに関しては、彼女が実に心優しい人であることを示しているし、忌み人ということに関しても誤解があるのかも知れない。

特に父様が虐待に関して怒り心頭の様子。

厳しい顔で怒られると、ちょっと怖い。

涙出そうになった。

まあ、そんな訳で、両親の了解は得られたので、まずはミレイをウチにかつさらう次第。

つてことで、朝から孤児院を張っている訳です。

・・・不審者ですかね。

いや。

子供なんだから大丈夫。

・・・大丈夫。

・・・めげそうです。

お、あれは・・・えっと・・・アルフだったか。

「アルフ！」

「おや？こんにちは。」

「ウィルから声を掛けてくるとは思っていないんですけどよ」

「うん。そうだね。」

それはそれ。

「ミレイを見なかった？」

「今日・・・ということですよね？」

「うん」

「今日は見てないですね」

「そうか。ありがとう」

「・・・なんですか、その・・・もう行っていいよみたいな扱いは」

「いや、行っていいよ？」

「ふう。相変わらず変な人ですね。」

「それで、今日はどうしたんですか？」

「ミレイ待ち」

「はあ・・・ミレイ待ちですか」

「そそ。張り込み中だから行っていいよ」

「じゃあ、張り込みしながらでいいので、話ませんか」

思わず、なんとも言えない顔でアルフを見てしまった。

「ほんと、変な人ですね」

「いえいえ。こんな所で張り込みをしている5歳児ほどではありませんが」

・・・更に何とも言えない気持ちにさせられた。

「新しい遊び・・・ってことはなさそうですね？」

「そうだね。・・・アルフに協力してもらおうか」

「は？」

「うん。悪くない。アルフに協力してもらいましょう。」

是非とも協力してください」

「えっと・・・何をですか？」
「ミレイをちょっとかつさらおうと思っていました」
「は？」
「ちょっとウチまで強制連行しようと思っただけです」
「はあ」
「ちょっと呼び出してきてくれませんか」
「いやいやいや。オカシイですよ。色々」
「そりゃあ、もう・・・色々」
「いいじゃないですか」
「アルフ！ウイル！で呼び合う仲じゃないですか」
「いやいや。呼び合うだけの仲ですよ」
「まあまあ、細かいことはいいじゃないですか」
「ここで貸しを作っておけば・・・程度に考えてくださいよ」
「そんな気軽な貸しじゃないですよ」
「ちょっと、うまいこと言って、ウチまで連れてきてくださいよ」
「あとはこっちでうまくやりますから」
「ウチまでって・・・結構距離ありますよね？」
「あとはって・・・ほとんど終わってますよね？」
「年上なのに小さいことを気にする人ですね」
「はあ・・・まあ、ウイルの家まで連れて行くくらいならいいですけどね」
「え？ほんとに!？」
「・・・なんです。その反応は」
「いえいえ。大助かりです」
「既に嫌われているので、ちょっとくらい強引にしても上乘せされるだけなので、気にしません」
「ちゃんとフォローしておきますよ」
「別にいいですよ」

まさか、ほんとうにやってくれるとは思わなかった。

ちよつとくらい強引つてのが引つかかるが、気にしてたら話が進みそうにないしな。

「ウチまでと言いましたが、さすがにそれもどうかと思いますので、その角まででいいですよ」

「そうですね。その方が助かります」

「とは言え、逃がしたくないので家まで付き合っ頂けると助かります」

「まあ、いいですけど・・・」

「じゃあ、角で隠れてますので・・・私の名前を出すと警戒されるかも知れませんが、うまく誤魔化してくださいよ」

「警戒つて・・・何をしたんですか？」

「まあまあ・・・じゃ、お願いしますよ」

「・・・はいはい」

アルフが素直に孤児院の方へ・・・本当に行ってくれるとは・・・言ってみるモンだ。

うん。彼の中の人はいい人だな。

しばらく時間を潰していると、アルフがミレイを連れて戻ってきた。さすがにうつむいてる。

いや。

昨日も、その前も、ミレイはうつむき加減だった気がする。

忌み人という枷が、前を向いて歩くということにも影響しているんだろうなあ。

「こんにちは。ミレイ」

「・・・え!？」

「これでお役ご免ですかね」

「いやいや、もうちよつと付き合っ貰う約束でしたよね」

「はああ・・・もう、結構疲れたんですが」

「貸していいですから、お願いしますよ」

「・・・あの・・・どういうこと？」

「ああ、僕がお願いしてミレイを連れてきて貰ったんです」

「・・・なぜ？」

「ちょっと連れて行きたいところがありました。

おいやですか？」

「・・・う・・・えっと・・・」

アルフを警戒してるね。

まあ、それはしょうがないよね。

「大丈夫です。彼には何もさせません。

もし、彼がミレイをいじめるようなら、僕が全力で守ります。

だから安心してください」

「・・・う、うん」

「じゃあ、行きましょう」

うなずくやいなや、ミレイの手を取って歩き出した。

「アルフは、約束どおり、付いてきてくださいね」

「約束ですからね」

「じゃあ、ミレイ・・・ちょっと歩きますよ」

「・・・どっ、行くの？」

「本当は目隠ししたいくらい内緒です」

強引に手を引いて連れてきた。

うん。

実にワルモノです。

口では嫌と言いながら、あまり強い反応がないので、つついっ本当

に連れてきてしまった。

「ウィルは、やっぱりいいところのお坊ちゃんだったんですねえ」

アルフがしみじみと言う。

「いいこと言うほどですかね？」

「十分、いいとこだと思いますよ」
「なるほど」

「世間知らずのお坊ちゃまですね」

「・・・なんか含みがありますね。」

まあ、いいです。アルフ、ありがとうございました」

「本当にこれでお役ご免なんですね」

「ウチにあがって、お茶でも飲んで行かれますか？」

「やめておきましょう」

「そうですか・・・さあ、ミレイ、到着です。家に入りますよ」

「え？」

「じゃあ、ウィル・・・私はこれで失礼しますよ」

「ええ、本当にありがとうございました」

「今日のごことは貸しにしておきますからね」

「お安くしておいてください」

「たっぷりと取り立てますよ」

「お手柔らかに」

「ははは、じゃ、また今度」

「ええ。また今度」

「あう・・・じ、じゃあ・・・また今度」

「ミレイはまだダメですよ」

「あう・・・」

「さあ、家にはいりましょう」

前庭を抜けて玄関へ。
そして玄関ホール。

「ただいま。母様、ミレイを連れてきました」
「あらあら。いらっしやい」

ミレイはおっかなびっくりで、僕の背中に隠れる。
なんとも・・・小動物ちつくで和む。

「まあまあ、可愛い。・・・美人さんね」

ふむ。

そうだよな。

将来は美人になりそうだ。
黒髪も綺麗だし。

「じゃあ、まずはお風呂に入りましょう」

「は？母様、お風呂ですか？」

「ええ、そうよ。」

可愛い子ですからね。

綺麗に磨き上げないと。

そうそう。ウィルはダメよ」

「も、もちろんですよ。何を言ってるんですか」

「あう・・・」

ミレイが拉致されていった。

ドナドナが聞こえてきそうだな。

ぽつぽつと1人残されてしまった。

えっと・・・リビングで待つかな。

来客の日(後書き)

T w i t t e r @ n e k o m i h o n p o

修正内容

引っかかりるが 引っかかるが

来客の日のリリーレルマ(母親)(前書き)

虐待(を臭わせる)表現が出てきます。苦手な方は飛ばして下さい。

来客の日のリリーレルマ(母親)

「じゃあ、ミレイちゃん……一緒にお風呂に入りましょう」

「え……」

「さあさあ」

「あう……」

ちよつと強引だけれど、ミレイちゃんをお風呂に連れて行ったの。忌み人として虐げられてきた期間が長かったからか、すっかり引込み思案というか、人との接触を極端に嫌っているみたい。そんな性分に育ってしまったことが悲しかったわ。脱衣所で服を脱がすと、服の下からアザだらけの身体が現れたわ。

「これは……」

「あの……えっと……」

思わずミレイちゃんを抱きしめてしまったの。

こんな子に……酷い虐待をするなんて。

なんて酷い……こんな素直な子を守ってあげたい……誰がこんなことを……と言った諸々のことがぐちゃぐちゃとして……

「あう……ごめんなさい」

「え？どうして謝るの？」

「だって……こんな……だし。忌み人……だから」

「ううん。謝らなくていいの。」

むしろ、私たちが謝らなければいけないわ。ごめんなさいね。つらかったでしょう？」

「えう？……ううん」

「冷えてしまうわ。お風呂に入りましょう」

「・・・どうしても？」

「そうね。折角だから、どうしても」

「うわ・・・あつたかい・・・」

「そう。よかった」

二人してお風呂に浸かる。

残念ながら、身体のアザや火傷の跡はヒールでは治せなかったの。

まあ、そんな気はしていたのだけれど・・・あまりにも酷いので治してあげたかったわ。

若いから、そのうち目立たなくなるとは思うのだけれど。

「ねえ。ミレイちゃん」

「・・・はい」

「ウチの子にならない？」

「え！？・・・だめ」

「あら。だめなの？どうして？」

「だって・・・嫌われちゃう」

「嫌われちゃう？誰から？」

「みんなが・・・みんなから」

「大丈夫よ。誰もミレイちゃんを嫌ったりしないわ」

「ううん・・・外のみんなから」

「大丈夫よ。ウチの人が守ってくれるから」

「ううん・・・嫌われるの・・・だめ」

「そう。優しいのね」

本当、優しい子。

忌み人を家族として引き取ってしまったら、家族が世間から爪弾きになるって子とを理解している。

なんて優しい子。
ぎゅっと抱きしめてしまったの。

「……ちよつと……苦しい」

「あらあら。ごめんなさい。」

ウチの子になるのがダメなら、ウチで働くのはどう？

これならミレイちゃんもそんなに困らないんじゃない？」

「え？……えつと……」

「そうね。ウチの子になつてしまうと、ウイルとの結婚で困りそうだし……身元の引き受けだけなら、家族ではないのだから、結婚で世間体を気にする必要も無いわね」

「え？……え？……あの……だめ」

「あら？ウチのウイルは嫌い？」

「……そんな……こと、ない……と思う」

「あらあら。じゃあ、問題は解決ね」

「え？……解決……してない」

「ウチで住み込みのメイドさんなんてどう？

きちんとお給金も出すし、家族には追々なればいいわ。

これならミレイちゃんも問題無いわよね」

「あう……困る……」

「あらあら。嫌なことは早めに解決しておかないとね。

何か嫌なことあるかしら？」

「えつと……忌み人だから……」

「ん……ミレイちゃんは忌み人じゃないわ。

これで問題は解決ね」

「え？」

「だって、ミレイちゃんはこんなにも良い子なんですもの。
忌み人なんかじゃないわ。

仕事のことは、ノイナからお聞きなさいな。

急がずに、ゆっくり憶えていけばいいから」

「あう・・・」

ちよつと強引すぎたかしら？

でもこれくらいしないと、この子は身を引いてしまいそうだし・・・
そういう部分は時間を掛けて解決していけばいいかしらね。

ゆくゆくはウィルのお嫁さんとして、家族になっていけばいいのだし。

「これから、よろしくね。ミレイちゃん」

「えう・・・」

来客の日のLINEアカウント(母親)(後書き)

Twitter @nekominonono

来客の日のミレイ（お客さん）

・・・ボクに泥を投げてた人・・・の仲間？の人が・・・ボクに用がある・・・って・・・怖い・・・から、付いていったら・・・昨日の子がいたの。

・・・どういうこと？・・・って思っていた・・・ら・・・連れられて・・・その子の家に着いたの。

帰ろうと・・・したら、ダメだって・・・忌み人なんか、家に・・・入れちゃ、ダメ・・・だよ？

おっきな・・・お家に入ったら・・・綺麗な人・・・

「あらあら。いらっしやい」

！？・・・ボクに、話しかけてきた・・・の？

「まあまあ、可愛らしい。・・・美人さんね。

じゃあ、まずはお風呂に入りましょう」

か、かわいい！？・・・美人！？・・・お風呂！？

お風呂・・・ボク？

忌み人なの・・・に！？

え？え？・・・どうして？

・・・ウィルの・・・お母さん・・・に、押されるように・・・連れて行かれたの。

・・・おかしい。

・・・おかしいよね。

・・・ボク・・・忌み人だよ？

おっきな・・・お風呂で・・・すく・・・暖かくて・・・ウィル

・・・なんで？
・・・解らない。

「そうね。ウチの子になってしまうと、ウィルとの結婚で困りそうだし・・・身元の引き受けだけなら、家族ではないのだから、結婚で世間体を気にする必要も無いわね」

け、結婚・・・!?

結婚・・・って・・・ボク・・・無理！

「え？・・・え？・・・あの・・・だめ」

「あら？ウチのウィルは嫌い？」

・・・え？え？

・・・えつと・・・よく解らない。

・・・けど・・・ウィルは・・・やさしい。

「・・・そんな・・・こと、ない・・・と思う」

「あらあら。じゃあ、問題は解決ね」

「え？・・・解決・・・してない」

「ウチで住み込みのメイドさんなんてどう？

きちんとお給金も出すし、

家族には追々なればいいわ。

これならミレイちゃんも問題無いわよね」

・・・忌み人だから・・・よく・・・ない。

「あう・・・困る・・・」

「あらあら。嫌なことは早めに解決しておかないとね。

何か嫌なことあるかしら？」

「えっと・・・忌み人だから・・・」

「ん〜・・・ミレイちゃんは忌み人じゃないわ。」

「これで問題は解決ね」

「え？」

「だって、ミレイちゃんはこんなにも良い子なんですもの。」

「忌み人なんかじゃないわ。」

「仕事のことは、ノイナからお聞きなさいな。」

「急がずに、ゆっくり憶えていけばいいから」

「や・・・話、通じてない・・・」

「あう・・・」

「これから、よろしくね。」

「ミレイちゃん」

「えう・・・」

お風呂・・・上がったら、真っ白なもこもこで・・・身体を拭かれたの。

「すっごい・・・柔らかくて・・・もこもこ。」

「ウィルの・・・お母さんが、拭いてくれた・・・の。」

「そしたら、別の・・・女の人が・・・服を着せて・・・くれたの。」

「・・・すべすべ・・・で、綺麗で・・・ボクの服じゃなくて・・・」

「でも、ボクにぴったり。」

「・・・あの・・・これ・・・」

「はい。リリー奥様から、メイド服を用意するように。このことでしたので、急ごしらえで申し訳ないのですが、ミレイさんに合っとう、仕立てました。」

「サイズに問題はありますか？」

「・・・そ、そうじゃなく・・・て・・・ボクの服・・・は？」

「ああ・・・元の服ですか。」

今、洗濯をしている最中ですので、これで我慢ください」

「・・・でも・・・ボク・・・忌み人」

「いいえ。今日からはランカスター家の使用人の一人だと伺っております」

「・・・あう」

・・・この人も・・・忌み人って・・・解ってくれない。

「ほら、ノイエ。ミレイちゃんが脅えちゃってるわ。」

いきなり口調が厳しいわよ。」

もつと優しく接しなさいな」

「そうですね。ちよつときつかつたかも知れません。」

しかしながら、曲がりなりにも、ランカスター家の使用人となるのですから、お客様対応という訳にもまいりません」

「そうですね。まあ、そんな厳しいことは追々でいいから、新しい家族が増えたと思って接してあげなさいな」

「そうですね」

「・・・忌み人だから・・・だめなの」

「いいえ。違いますよ。」

新しい家族です」

「そうですね。所で、お着替えは終わったかしら？」

「はい。奥様」

「どれどれ。まあ、ほんと可愛らしい」

・・・ぎゅって・・・抱きつかれたの。

「・・・あう」

来客の日のミレイ（お客さん）（後書き）

Twitter @nekomihonpo

ストックほとんど無いのに、反応があるとなじいじい嬉しくなって放出してしまっ病。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0815z/>

ヒール最高

2011年12月11日02時50分発行